

# 織田作之助と別府

矢島 嗣久

織田作之助、通称「おださく」は大阪に生まれ小説家を志した。次姉の千代夫婦をモデルにした「夫婦善哉」で世に知られるようになった。作之助は千代夫婦を頼り、しばしば別府を訪れ、流川を舞台にした小説を発表した。

## 一 織田作之助の生い立ち

織田作之助は大正二年（一九一三）十月二十六日、大阪市南区生玉前町五二一五（現天王寺区）に生まれる。父織田鶴吉、母たかゑ三十三歳の長男。事情があつて母の兄鈴木安太郎の戸籍に記載されていた。のち両親の婚姻届けで、父の認知届け出とともに織田姓に改められた。家業は仕出し屋である。店を半分にかけて、南側で魚屋を、北側で寿司屋を営んでいた。長姉（竹中）たつ、九歳、次姉（山市）千代、七歳、三姉きく、二歳があり、のち妹（西沢）登美子が生まれる。作之助は姉が三人、妹が一人、作之助だけが男一人であった。

大正七年（一九一八）作之助が五歳のとき、次姉千代が十三歳で北の新地へ芸妓見習いとして出る。東京は芸者、関西は芸妓と称していた。

大正十三年、次姉千代が十九歳で大阪市北区曾根崎で理髪店相手の化粧品問屋の若旦那だった山市席次と駆け落ちし、のち結婚する。

千代は三味線を習い、女義太夫の大会に出場して受賞するほどだった。作之助も浄瑠璃を好んでいた。

大正十五年・昭和元年（一九二六）、作之助十三歳が小学校を卒業し、四月、大阪府立高津中学校（現、府立高津高等学校）に入学する。

昭和五年十二月二十四日、作之助が十八歳のとき、母たかゑが死去する。享年五十歳。

昭和六年（一九三一）三月、十八歳の作之助が高津中学校を卒業し、四月には旧制第三高等学校（のちの京都大学教養部）文科甲類に入学する。

昭和七年九月、作之助が十九歳のとき、父鶴吉が死去する。作之助は、日本橋の竹中家の居候となる。竹中国治郎、タツ夫婦は小説「表彰」の伊三郎とお島のモデルでもある。竹中家では電気店を営んでいた。

## 二 文壇に登場する

昭和八年（一九三三）、作之助が「嶽水会雑誌」に処女戯曲「落ちる」を発表する。

同年十月、作之助は在学中、病気で留年した青山光二と親交を結ぶ。

昭和九年二月、作之助は卒業試験の最中、下宿で咯血した。出席日数が不足したため三高卒業を認められず、現級にとどまる。大阪に帰り、静養する。

京都の三高の近くにあったカフェー「ハイデルベルヒ」のダンサーとして住み込んでいた宮田一枝と知り合い、夜半、「ハイデルベルヒ」の二階にはしごをかけて、一枝を連れ出した。そのまま同棲関係となる。一枝、二十二歳。

昭和十年、作之助が二十二歳のとき、卒業試験を受けず、

再び原級にとど

まる。十二月、

青山光二、白崎

礼三らと同人雑

誌「海風」を創

刊する。

昭和十一年三

月、作之助二十三歳のとき、出席日数が足りず第三高等学校を退学する。やがて作之助は東京へ行くことになる。

同年六月、一枝と一緒に大阪心斎橋筋を歩いているのを義兄竹中国治郎が知ることにになり、竹中家を追われる。

昭和十二年五月、作之助が再び上京して、本郷の下宿に住む。

昭和十二、十三年頃、大阪へ戻ってきた作之助はいつも着流し姿で、波屋書房で買った本を懐に入れ「自由軒難波本店」にやってきて、「混ぜカレー」の別名をもつ「名物カレー」をよく注文していた。本の代金は長姉の竹中タツが支払っている。

昭和十三年、作之助二十五歳。同年八月、同人雑誌「海風」四号に処女小説「ひとりすまう」を発表する。

## 三 「夫婦善哉」を発表する

昭和十四年（一九三九）四月、作之助が二十六歳のとき東京生活から大阪に戻り、富田林の義兄、長姉タツの夫、竹中国治郎方に寄寓する。

同年七月十五日、大阪の新聞社に就職した作之助が宮田一枝と正式に結婚する。一枝、二十七歳。結婚した一枝は執筆



織田作之助の写真  
日本近代文学館蔵

する作之助の後ろに控え、辞書を引いて協力していた。

昭和十五年（一九四〇）、作之助が二十七歳、一月、妻一枝とともに別府の山市千代夫妻のもとに旅する。

同年四月に、作之助が「夫婦善哉」を同人雑誌「海風」に発表する。六月、改造社の第一回文芸推薦作品にほとんど満場一致で受賞となる。作之助は新進作家としての地位を獲得した。両親の姿は「夫婦善哉」の一銭天ぶら屋の種吉・辰夫婦に写されている。

山市厩次、千代夫婦は「夫婦善哉」の「サロン蝶柳」のモデルでもあった。「作の奴め、こんなん書きやがって」柳吉のモデルにされた厩次に、千代は「このとおりやないの」と一喝、シュンとなる厩次であった。

#### 四 厩次、千代夫婦と作之助

平成十九年十月に発行された「夫婦善哉・完全版」によれば、昭和九年（一九三四）、次姉、山市厩次、千代夫婦が別府に渡り、別府の中町に落ち着き、商売を始めた。中町とは流川通りから秋葉神社までの旧国道付近。前に理髪店が二軒あったというから「お菓子のお亀屋」（秋葉町六）付近の建物二階らしい。昭和十三年頃は当地で営業していたらしい。



山市厩次と千代夫婦 中村圓正さん提供

業種は「電気器具・理髪器具」となっているから、理容店相手の商売および電気器具、電球等の販売も手がけていたようである。その後、流川四丁目で化粧品店の「山市商店」を開いた後、流川界隈で割烹「文楽」を開業した。この割烹は料理店程度との話もある。当時千代は二十八歳。場所は別府市元町一丁目、流川四丁目の松下金物店の左隣、西側付近だった。

千代夫婦が別府へやってきたのは、大阪・下寺町に開いた「サロン千代」が、道路拡張により立ち退きになったのがきっかけらしい。

千代は三味線を弾いて、浄瑠璃をしていた。夫厩次は遊び手で、酒飲みだった。

浄瑠璃とは広辞苑によれば、平曲・謡曲などを源流にした、



浄瑠璃会の山市千代(中央) 中村圓正さん提供

とは操人形浄瑠璃芝居の称。大正初期、この系統の芝居が文楽座のみになったことによる名称とある。

作之助は昭和十年(一九三五)から十八年(一九四三)にかけて、しばしば別府を訪れて、姉の千代夫婦のところでは別府の流川を中心とした小説の構想を練っていた。妻の一枝も義姉千代から別府へ誘われたらしいが、来別は一度しか実現しなかった。

昭和十一年か十二年頃、千代夫婦は店を女中と丁稚にまかせて、別府市公会堂(現別府市中央公民館)で十月三日から

語り物のひとつ。また、それから発達・派生した音楽・演劇をもいう。元禄時代、

竹本義太夫が集大成して義太夫節を完成、近松門左衛門らと組んで人形浄瑠璃として人気を得、ここに浄瑠璃は義太夫節の異名となった。文楽

五日にかけて開かれた浄瑠璃大会に出場している。市次の芸名は「虎寿」、千代は「寿々女(すずめ)」。千代の演目「太十」は大閤記十段目のこと。夫席次は「電気七輪(電熱器)」三個を賞品として寄付している。

昭和十三年(一九三八)五月、作之助は別府の姉、千代を訪ねて七月まで滞在する。

作之助の妹登美子夫婦は大阪で呉服商をしていたらしいが、商売がうまくいかず、千代夫婦を頼って昭和十五年十二月に別府へ転居した。登美子夫婦は別府駅前通りで食堂「若葉食堂」を営んだ。

昭和十八年八月、登美子の夫・多四郎が徴用される。心配した作之助が来別して、登美子の店を訪れている。これが作之助の別府に訪れた最後となった。

千代夫婦は終戦の翌年、昭和二十一年には骨董品などの店を経営した。

##### 五 別府を小説の舞台にした作之助

昭和十六年(一九四二)六月、作之助が二十八歳の時、別府市流川付近を舞台とした「雪の夜」を雑誌「文芸」(改造社発行)に発表する。「大晦日に雪が降った。朝から降り出

して、大阪から船の着く頃にはしとすと牡丹雪だった。夜になってもやまなかった、「雪の夜」の書き出しである。

これにはバスガイドが流川通りを「別府の道頓堀でございます」と紹介している。

作之助は「雪の夜」と前後して「放浪」「競争」など、別府を舞台にした作品を発表しているが、地域は別府の流川通りとその周辺部に限られていた。

同年秋、書き下ろし長編「青春の逆接」を刊行する。まもなく、それが発禁処分を受ける。

昭和十九年八月六日、作之助が三十一歳のとき、妻一枝三十二歳が子宮ガンで死去した。

同年、「映画評論」に掲載された脚本「四つの都」は、「還つて来た男」(監督・川島雄三)として昭和十九年七月に松竹で映画化されている。出演は佐野周二、田中絹代、三浦光子である。

同年十一月、作之助は東京劇場で上演された「わが町」に出演していた輪島昭子、芸名築地燦子さやかと知り合い、やがて同棲関係となる。昭子、二十二歳。

昭和二十年一月、作之助三十二歳の時、一月三十日から三日間、ラジオドラマ「猿飛佐助」を大阪中央放送局からラジ

オ放送する。この番組は放送賞を受賞している。二月、「猿飛佐助」を雑誌に発表した。

昭和二十一年(一九四六)七月、作之助三十三歳の時、別府を舞台にした「湯の町」(トップライト)を発表。これにも「流川通りは別府温泉場の道頓堀だ」と書かれている。十月、同じく別府温泉を部隊にしたみやげ物屋の看板娘の物語である「怖るべき女」を雑誌「りべらる」に連載しはじめる。

平成十四年(二〇〇二)三月、別府市の末広郵便局長だった河村建一氏が楠町十一にある寿温泉の西側に「『流川文学』発祥の地」の石碑を建立した。これによると名作「夫婦善哉」で知られる織田作之助は「雪の夜」「湯の町」や、「怖るべき女」など流川界隈を作品の舞台にしている。

徳田秋声も、「西の旅」で描写し、明治、大正、昭和初期には、多くの文人墨客は別府温泉を訪れ、流川を作品に残している」と記されている。

## 六 作之助の最後

昭和二十一年(一九四六)十一月十一日、作之助は読売新聞に連載中の小説「土曜夫人」の舞台が東京に移るため、取材かねて上京した。築地の旅館に一週間ほど居てから銀座

二丁目の佐々木旅館に移った。十二月五日午前二時頃、作之助は大量の咯血をした。

三高時代からの友人青山光二が旅館に駆けつけていた。この旅館に菊池寛が見舞いにやってきた。「いま死じまっちゃア、つまねじゃねえか」、「しっかり養生しろよー」と言いいおいて菊池寛は、傍らのハンチングをつかみざま立ち上がった。

菊池寛は明治二十一年十二月、香川県高松市の生まれ。昭和二十三年に死去。小説家、劇作家、雑誌「文藝春秋」を創刊した。

十一月中旬、作之助が東京病院（旧東京病院、現慈恵医大病院、JR新橋駅西側）に入院する。林芙美子が見舞いに訪れた。芙美子はこの部屋を見回して、「パリの留置場みたいね。元気になってよ」と声をかける。作之助はふとんに埋もれて、「大阪へ帰りたいが、もうあきらめた」とほほえんでみせた。

林芙美子は明治三十六年生まれ、昭和二十六年死去。小説家。私小説「放浪記」、女流文学者賞の「晩菊」、絶筆「めし」等がある。「花の命は短くて、苦しきことのみ多かりき」の言葉が有名。

昭和二十二年（一九四七）一月十日十九時十分、東京病院で作之助が「思いが残る」という言葉を最後にして輪島昭子に看取られつつ永眠する。作之助、享年三十四歳。作之助の戒名「常楽院章誉真道居士」。当時、昭子は二十五歳。通夜は東京病院のすぐ近くの天徳寺で行われた。

翌一月十一日、芝の浄土宗天徳寺（JR新橋駅および旧東京病院の西側。愛宕山トンネルの近く）で通夜、翌十二日、桐ヶ谷火葬場で荼毘に付され、長姉タツ、次姉千代と義兄竹中国治郎、輪島昭子、太宰治、林芙美子、十返肇、青山光二、ペリカン書房主人の品川力が骨を拾った。二十三日、告別式は大阪天王寺区の楞嚴寺で行われ、葬儀委員長は藤沢恒夫、喪主は義兄竹中国治郎であった。妻一枝と共に同寺に葬られている。

太宰治は小説家、「斜陽」「人間失格」「グッド・バイ」等がある。

十返肇は高松市生まれ、文芸評論家である。

織田作之助の妹登美子（夫・西沢多四郎）の娘禎子が織田家の家督を相続した。

「怖るべき女」が未完となる。昭和二十二年三月、「怖るべき女」が実業之日本社から刊行された。

輪島昭子は作家の林芙美子の世話になり、その後、新宿のホテルの酒場を経て、銀座にバー「アリババ」を開店し、マダムとなった。

平成十六年十二月十三日、輪島昭子が死去する。昭子はずっと飾っていた作之助の写真を胸に抱いて茶毘に付された。享年八十二歳。

## 七 その後の厩次、千代夫婦

千代夫婦は戦後（昭和二十年）になって別府の駅裏に元南画家白須心華の別荘跡を手に入れ、庭付き五百坪の割烹旅館「文楽荘」を開業していた。場所はJR別府駅西口の北側、野口元町二、現在「仲間通り」に面した「割烹旅館 千成」の北側駐車場となっている。

白須心華は明治四年、大分県臼杵の出身で、明治二十五年、海軍省に出仕した。

心華は画を明治三十年代から始めており、その後東京で南画塾を開いた。晩年は別府に居住し、余生を送った。昭和十四年八月に死去、享年六十九歳、墓は臼杵にある。

昭和三十年の映画「夫婦善哉」がヒットしたことから、千代夫婦が甘党の店と居酒屋が隣り合う店、その名も甘味処

「夫婦善哉」を始めた。場所は竹瓦温泉の横丁にあった。店の入り口は甘党・辛党それぞれ別々だったが、中では一緒になっていた。現在は「食堂の一二三」の位置となっている。

別府の店「夫婦善哉」には俳優森繁久彌も一度訪れている。昭和三十四年頃、千代夫婦は「夫婦善哉」の隣に左党向けの「バー・タデ」も営業していた。

昭和四十年代前半頃、千代は人にだまされて、野口元町の割烹旅館「文楽荘」を手放したという説もある。このころ、夫厩次が病死したらしい。千代は別府市鶴見の新別府病院前（病院の西側道路の山手）に小さな料理屋「夫婦善哉」を開業した。その後、糖尿病が悪化し、昭和四十六年（一九七二）、新別府病院で死去する。享年六十五歳。千代の遺骨は姉タツが引き取り、大阪の山市家の墓に入ったとされるが、はっきりしていない。その後、長姉タツは晩年を堺市で療養し、亡くなっている。

大阪千日前の洋食屋「自由軒」の店内には作之助が思案しながら執筆中の写真が掲げられていて、その額縁には「トラは死んでも皮をのこす」「織田作死んでカレーライスをのこす」「自由軒本店」「オダサク文学発祥の店」が書かれている。

かなり年数がたつてから作之助の姉が来店して「作ちゃん、こんなふうには飾ってもらってありがたいねえ」と拝んでいた。

## 七 「夫婦善哉」の上演

昭和三十年（一九五五）九月、「夫婦善哉」が映画になる。

監督、豊田四郎、出演、森繁久彌、淡島千景、司葉子。森繁久彌は大阪の出身である。

昭和三十八年十月にも「新夫婦善哉」が映画化される。監督、豊田四郎、出演、森繁久彌、淡島千景、淡路恵子。

昭和四十三年（一九六八）一月、「喜劇・夫婦善哉」が映画化される。監督、土井通芳、出演、藤山寛美、野川由美子、長門裕之。

松竹演劇部主催の舞台「夫婦善哉」は昭和二十三年からほぼ毎年上演されており、主役は蝶子役が淡島千景、柳吉役が森繁久彌、また淡島千景と中村扇雀、野川由美子と山城新吾、藤山直美と林与一、中村玉緒と藤田まことらが出演している。平成十七年三月、松竹株式会社主催の三月公演では織田作之助原作の「夫婦善哉」が公演され、主役は蝶子役が藤山直美、柳吉役が沢田研二だった。

## 八 オダサク倶楽部

大阪では平成十四年（二〇〇二）にファンが中心となり「オダサク倶楽部」（発起人、井村身恒氏）を結成、翌年十月には別府のファンが「別府オダサク倶楽部」を設立した。二つの倶楽部は路地裏情緒を活かしたまちづくりをめざし、交流を続けている。

別府市楠町十組、楠銀座街（ソルパセオ銀座）の「いろは寿し」前の喫茶店「しんがい」には「流川文庫」として別府ゆかりの文学資料、地図、絵はがき等が展示されている。

別府の流川を舞台にした文学には、織田作之助の小説の他に徳田秋声の「西の旅」、火野葦平の「別府夜話」等がある。織田作之助は七年間（昭和十五年～昭和二十一年）の作家生活のあいだに書いた短編小説の数は五十数編に及ぶ。

昭和二十五年一月、新潮文庫から小説「夫婦善哉」ほか「木の都」、「六白金屋」、「アド・バルーン」、「世相」、「競馬」が一冊の本にまとめられて刊行された。「世相」と「競馬」は戦後の作品である。「解説」は友人だった青山光二氏が書いている。同書は平成十七年四月、第四十二刷を数える。

現在、大衆文学振興会により「織田作之助賞」（年一回公募、二〇〇六年で二十三回）が主催されている。



## 九 「夫婦善哉・完全版」の発行

最近、織田作之助の「夫婦善哉」の続編が鹿児島県・川内市の資料館から発見された。

続編を含む夫婦善哉は、平成十九年（二〇〇七）十月一日に「夫婦善哉・完全版」雄松堂刊として発行された。

平成十九年十二月八日、別府大学では各地から研究者五氏を招き、テーマ「織田作之助の世界」の公開講演会が開催された。講師は平野芳弘平野資料館長、重岡徹別府大学教授、井村身恒オダサク倶楽部仕掛人、日高昭二神奈川大学教授、浦西和彦関西大学教授の五氏である。

## 謝辞

取材に際しましては、別府市末広町の河村建一、市内大畑の川田康、野口元町の割烹旅館「千成」の浅野直樹・はつよ御夫妻、旅館「野上本館」の野上泰生、別府オダサク倶楽部・中野護、大阪府堺市、「オダサク倶楽部」の井村身恒の諸氏に御協力をいただきました。

紙上を借りて厚く御礼申し上げます。

## 引用参考文献

雑誌「大阪人」、二〇〇六年八月号、第六十巻、特集、「文士オダサク読本」

インターネット、ウィキペディア、その他を参照

新潮文庫「夫婦善哉」織田作之助著 新潮社版、平成十七年四月

別府史談 第十号 一九九六年 「別府を訪れた文化人たち」大塚俊英

別府市誌 昭和六十年 第八章 「訪れた文人墨客」

別府市誌 二〇〇三年七月、第三巻、文学、「別府を訪れた文人」、別府を題材とした文学

今日新聞 野口中央温泉と白須心華の看板

今日新聞 「文学散歩 織田作之助」 平成十九年十一月  
「夫婦善哉・完全版」平成十九年十月 雄松堂版

## 写真の提供

日本近代文学館

雑誌「大阪人」二〇〇六年六月号、第六十巻

中村圓正さん、別府市駅前本町